



子育てを応援する私たちで

園長 野中 泉

新年あけましておめでとうございます。今年もいい年になりますように

昨年（2024年）は一年を通して認可20周年の節目の挨拶をお世話になった方々にさせていただいたのですが、年末には、市原前理事長と、山本理事（アトム共同保育所 初代所長）と共に、熊取町の京都大学複合原子力科学研究所に、お礼とご挨拶に伺いました。昨年保護者の皆さんにもお配りした記念誌にも書きましたが「アトム」は、この原子炉実験所（当時）内の職場内保育所として産声をあげ、その後実験所敷地内に園舎がありながら、地域に広く開かれた保育所となっていました。現在のアトム共同保育園からもご近所ですが、私は今回初めて研究所の敷地内に入らせていただきました。驚いたことに、当時を知る職員の方、また、当時（無認可アトム共同保育所）の保護者の方もまだいらっしゃって、持参させていただいた昔の写真に「ああそうでした、このあたりをお子さんたちが走り回っていましたね」と、実験所の職員の方々と市原、山本両氏が懐かしそうに当時を振り返る姿が印象的でした。何より「研究職の女性たちが子どもを産んでも仕事を続けることを支えた保育所ですか。男女共同参画、多様な職場での女性の登用、女性が働く環境の充実など今やっと世間で当たり前に言われるようになったことが、今から何十年も前に実現されている、改めて先駆けだったんですね」と感心しながら資料に目を通されていた研究所の現在の事務局長さんの言葉が心に残りました。

その時に、アトムで夜間保育をはじめるきっかけとなった研究職のお母さんとお医者さんのお父さんのご家庭の話も出たのですが、帰ってからうちの明子さん（林事務員）にその話をすると「うちの子と旧のアトムで同じクラスだった子のお母さんのおうちだったのよ」と教えてくれました。「夜間保育がまだない頃から、保育士が自分の家に連れて帰って家庭保育もしてたんだけど、それでも足りなくて、お母さんが自分で電信柱に夜間のベビーシッターのチラシを貼って、何人ものベビーシッターの家で順番に子どもを預かってもらっていた。私の子育ての頃って男女雇用均等法成立なんて騒がれてたけど、世の中は、まだまだそんな理想とは程遠くて、長時間他人に預けて働くなんて母親失格なんて言う人もいた。でも、そんな中で自分の仕事に誇りを持って、子どもがいてもその仕事を続けたいと願い努力するそんな女の人が身近にいることに、とっても刺激を受けたし、その経験が今の仕事（働くお母さんを応援する）につながってるなって思うわ」。

『いまだきめずらしいプレハブの建物。強風のときには、ベランダの柱がいつもずれてしまします。それを引っぱって修理するのも、保母の仕事。三年前の地震のとき、もうつぶれてしまったかも、とヒヤヒヤしながら見に行くと、どこも壊れずにいつもの姿で建っていました。消防署の方は「揺れに対して抵抗なく揺れたので、つぶれなかつたんでしょうねえ」と、解説してくれました。これが、親と子どものよりどころとなっているアトム共同保育所の姿です』（1988年発行『ひとりじゃ子育てできっこない』かもがわ出版 著者 アトム共同保育所 監修 汐見稔幸 より）

これは、1988年出版の「ひとりじゃ子育てできっこない」の冒頭の引用です。色あせた写真に残るボロボロのプレハブアトム、その中で信じられない薄給で奮闘していた保母たちが「親と子どものよりどころになっている」と言い切ることができたその心意気と、「揺れるからこそつぶれないアトム」に保護者が寄せてくれていた信頼。このふたつに新しい勇気をもらって、また、新たな一年を始めたいと思います。